

座長集約

演題群Ⅵ Angio

埼玉県済生会栗橋病院

宝田 順

演題群Ⅵでは Angio について 5 演題の発表が行われた。それぞれ演題ごとにまとめる。

演題番号 29 PCI 支援アプリケーションの特性についての検討

心血管内治療において留置したステントの視認性を向上させる支援ソフトについての内容であった。心拍の変化、バルーンマーカの方向依存性、絞りの有無による応答特性の検討結果は、stent view が照射野内の高吸収体を自動で検出するため心拍の変化、バルーンマーカの方向依存性よりも照射野内に入るバルーンマーカ以外の高吸収体を誤認識してしまう影響が考えられた。そのため絞りを使用することで、照射野内の高吸収体を除去でき、応答特性の精度が向上する結果となった。支援ソフトの特性を検証した有意義な発表であった。今後の研究にも期待したい。

演題番号 30 当院における心臓カテーテル検査での放射線技師の役割

心臓カテーテル検査における診療放射線技師業務体制は施設ごとに様々である。今回、診療放射線技師がセカンド業務に携わり、その業務内容と有用性についての報告であった。セカンド業務内容は①デバイスのセッティング、受け渡し業務②指示の下、造影剤の注入レートおよび量の変更③フレーミングと C アーム操作を中心に行っている。診療放射線技師が C アームのプログラミングおよび操作することで、バイプレーンを積極的に使用でき造影剤を減らすことが可能となった。業務拡大の視点から考えてもチーム医療の推進、モチベーションの向上に繋がると思われる。

被ばくの管理を含め、セカンド業務における教育プログラムの構築も必要と思われた。

演題番号 31 埼玉県内における頭部領域 IVR 被ばく線量の現状～最適化へ向けて～

IVR は装置、デバイスなどの開発に伴い件数は増加傾向にある。しかし、施設ごとに被ばく線量が異なるのが現状であるため、4 施設の装置メーカーを使用し頭部領域における IVR の透視・撮影入射表面線量を比較し検討した内容であった。幾何学的条件を合わせることで施設ごとの透視・撮影入射表面線量を把握でき、施設間で差が生じていることも確認できた。条件設定の工夫や使用する視野サイズを変えることで入射表面線量は変わった。測定結果を踏まえ被ばく低減に繋がる対策を講じ臨床に反映できるものと期待される。

演題番号 32 埼玉県内における頭部領域 IVR 被ばく線量の現状～最適化へ向けての撮影条件と画像特性～

演題番号 31 に続き、透視・撮影入射表面線量の差が生じていることから、頭部領域 IVR の適正線量を検討するため、FPD 入射線量設定値を変化させ被写体厚の違いによる SNR と面積線量の関係を検討した内容であった。基準 FPD 入射線量を上げると SNR、面積線量は増加した。装置の特性上 RAW データベースでの測定、比較は現状困難であるが、得られたデータは自施設の撮影条件を決定する上で比較、検討に有意なものであった。今後の課題として上げられた CNR、MTF、NPS の検討を引き続き報告していただきたい。

演題番号 33 PCI 施行時に左外腸骨動脈仮性動脈瘤をきたした症例の検討

経皮的冠動脈形成術後に医原性の仮性動脈瘤を起した症例について、診断から治療までの経緯を様々なモダリティ画像を供覧し報告した内容であった。その中で早期診断のためには、診療放射線技師の読影能力が求められてきている。技師から医師への早期コンサルタントで治療が行えた症例であった。チーム医療の推進により読影の補助

を行うこととされる中、より有益な検査となる様に我々診療放射線技師は努力を積み重ねていかなくてはならないと感じた。

機器・被ばく管理、画像評価、業務体制と幅広い発表内容であった。今後も発展を続けることが予想される血管撮影分野において、診療放射線技師はチーム医療の推進を目的に技術だけでなく業務拡大にも努めていく必要があると思われた。